

二〇一六（平成二十八）年度 第一回入学試験問題

国語（五〇分、一〇〇点）

受験についての注意

- 一、試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かない
てください。
- 二、問題は□～□まであります。
- 三、各問題とも、解答は解答用紙（別紙）の所定の欄
に記入してください。
- 四、解答题には受験番号、氏名を必ず記入し、最後
にもう一度確認してください。

I 次の①～⑥の傍線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に改めなさい。

- ① 工場を誘致する。
- ② 液体を吸引する。
- ③ 返事を促す。
- ④ 経済学をセンモンとする。
- ⑤ 作戦をネる。
- ⑥ 火星をタンサする。

II ⑦～⑩の熟語や慣用語の□に共通して入る漢字一文字ずつを、次の中からそれぞれ選び答えなさい。

- ⑦ □見 □食 □歳 □見
- ⑧ 青写 □骨頂 □猿 □似
- ⑨ 我田引 □山紫 □明 □魚の交わり
- ⑩ □が出る □元を見る □浮き □立つ

日・水・海・超・足・口・月・手・真・実・腹

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

作家になり、新人賞を受賞した「ぼく」が少年の頃、近所に「おばあさん」が一人でレジ台に座っている「ミツザワ書店」という小さな本屋があった。高校生だった「ぼく」は、その書店で一万円近い「箱入りの分厚い本」に強くひかれたが、お金が貯まらずその本を盗んでしまった。

制服を着替えもせず、盗んだ本を開いた。読みはじめてすぐに引きこまれた。夕食よ、と母から声をかけられても聞こえなかったくらいだ。食事をしているあいだも、続きを読みたくて仕方なかった。猛スピードで風呂に入り、部屋に戻って本を開いた。盗んだことなんてすっかり忘れていた。

気がついたら、空が白んでいた。すげえ。静まり返った部屋で、ぼくはそれだけつぶやいた。それしか言葉が思いつかなかった。すげえ。すげえ。すげえ。その言葉ばかりくりかえした。自分はほんものの阿呆あほうなどと、すげえとくりかえしながら知った。この本にはこれだけの言葉があふれているのに、それをぼくは、すげえという一言でしか言いあらわせないのだから。

明くる日はほとんど徹夜状態で学校にいった。頭のなかは、読んだばかりの本の言葉があふれかえっていた。しかしそのどれも、だれかが書いた言葉であって、ぼく自身の言葉というのは、あいかわらず、阿呆な一言しかなかった。

その日はミツザワ書店を避けて、遠まわりして帰った。
 ② 以来、母親に買ってもらったものを頼まれてもミツザワ書店へは決して近づかなかった。そのまま十八歳になり、進学のため都心に出て、正月に帰省しても、もちろんミツザワ書店にはいつていない。盗んだ本は、ずっとぼくの本棚におさまり続けている。

自分にはとうてい不釣り合いな、小説③というものを書いてみようと思ったのは、一昨年の暮れだ。なぜなのか、うまく説明できない。ただ、ずっとぼくのなかに、あのときの気分が残っていたのはたしかだ。この本にはこれだけの言葉があふれているのに、それはすべて他人の言葉で、ぼく自身の言葉といたら、何も言っていないに等しい幼稚な一言でしかない、というような気分。自分の言葉で、自身の言葉だけで、何かを言えないものか。拙つたくてもいい、饒舌※しやうせつでなくともいい、何か、何かないか。自分の言葉を捜さがすようにぼくは文字を書き連ね続けた。

年末も新年も帰省せず、アパートに閉じこもって、書いては消し、書いては消し、まるで水に映った月を掬うようにして書き続け、三月半の後、ほくの言葉はまとまった枚数になった。それが小説といえるのかいえないのかさえもわからないほど、ほくは小説というものを知らなかった。せっかくこれだけ書いたんだから、という貧乏根性だけで応募したのだった。

新しい年になって三日目、朝から続々と親戚が詰めかける実家を抜け出して、ほくはミツザワ書店に向かった。財布には盗んだ本の代金を入れ、手にした茶封筒には自分の本を入れて。

〔中略〕

「突然すみません」

もごもごとはくは言った。女の人はほくの前に紅茶を置く。香ばしいにおいがたちのぼる。

「あの、えーと、おばあさんはお元気ですか」

女の人は口元に笑みを浮かべたままほくを見て、

「他界しました。去年の春です」静かな口調で言った。頬をはられたような気持ちでほくは女の人を見た。そういえば、玄関になんの飾りもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家についていて、ちょうど今日は留守で、私もひまだったんですよ」

「えーと、あなたは、おばあさんの」

「孫です。三年前にここに引っ越してきて、この家で両親と暮らしています」

「それあの、ミツザワ書店は」

「祖母が伏せてから、ずっと閉めています。あとを継ぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲かるような店じゃなかったし、祖母の道楽みたいなものでしたしね。今は駅の向こうに大型書店もできて、うちが店じまいしてもみなさん困ることもないでしょう」

何か、とてつもない失敗をしかしたような気になった。自分は凶悪事件の加害者で、警察にいかず被害者の家に自首してきたような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫びしなきゃならないことがあって今日はここまで来たんです」

〔中略〕

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がって手招きをした。

玄関から続く廊下の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の方は塗装の剥げた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃っぽいような、甘い菓子のようなにおいがほくを包みこみ、目の前に、あんなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですね」女の人とともに、店内に足を踏み入れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本……。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読みましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのことあれば、時代小説のこともあったし、あるとき私がのぞきこんだら、UFOは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなってからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね」

女の人は積み上げられた本の表紙を、そっと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へもいったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよ」

それを言うなら子どものころのほくにとって、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとほくは思ったけれど、口には出さなかった。そのかわり、棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた。

「おばあちゃんの本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽ふっちゃうんだから」思わず言うと、女の人はまた楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をほくほく一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸いこみ、吐き出し、だれかに読まれるのをじつと待っているかのよう。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者しんさんという風情ふうせいで、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

札を言つて玄関を出た。門まで見送りにきた女の人は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思っっているんです」とちいさな声で言った。「図書館なんて X けれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持って行って、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っっているんですよ」

「そうやってほしいと、じつはさっき思っっていたんです。楽しみにしています」ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございます」女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「そうじゃなくて。本、お買いあげただいて」女の人はおかしそうに笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。店の前に並べられた週刊誌や漫画、埃で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるだろう。世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開くのだろうから。

不釣り合いでも、煮詰まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書く、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらい⑧の小説を書く、書き初めに向かう子どものような気分⑨で思う。

顔を上げると、青い空に凧たがひとつ浮かんでいた。

(角田光代『ミツザワ書店』による)

〔注〕※饒舌……よくしゃべること。

問一 傍線部①「盗んだことなんてすっかり忘れていた」とありますが、そのときの「ぼく」はどのような状態ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のしたことをあえて考えないようにして、ごまかそうとしている状態。
- イ 本を読むこと自体に夢中になり、その世界にのめりこんでいる状態。
- ウ 自分の部屋までは誰も追ってこないだろうと思ひ、安心してゐる状態。
- エ ずっと欲しかった本をようやく手に入れたことに満足している状態。

問二 傍線部②「そのまま十八歳になり、進学のため都心に出て、正月に帰省しても、もちろんミツザワ書店にはいついていない」とありますが、なぜ時間が経っても「ぼく」はそうしたのですか。十五字以上二十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部③「あのとときの気分」とありますが、それはどのような気分ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本の中に書かれている他人の知識に対して、自分の知識があまりに乏しいことを恥ずかしく思う気分。
- イ 今まで知らなかった豊かな世界が本の中に広がっていて、それを自分も実際に見てみたいという気分。
- ウ 自分のなかから生まれてくる言葉があまりに少なく幼くて、本の中にあふれる言葉に圧倒される気分。
- エ 自分の本当に言いたいことを、本の中で他の誰かが代わりに書いてくれていてありがたいと思う気分。

問四 傍線部④「まるで水に映った月を掬うようにして」とは、どのようにすることですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 次から次へと心に浮かんでは消えていく思い出を大切にしようとする事。
- イ 手に入れられそうで入れられないものを、何とかつかもうとする事。
- ウ 現実の世界にはありえないあやしい美しさをせめて残そうとする事。
- エ 本物の自分の言葉とにせ物の他人の言葉を区別しようとする事。

問五 傍線部⑤「頬をはられたような気持ち」とありますが、おばあさんが他界したことを聞いて、「ぼく」はどうしてこのような気持ちになったのですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑥「片づけるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど」と言う「女の人」が、実はおばあさんを大切に思っていることが最もよく分かる一文はどこですか。本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑦「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね」とありますが、祖母にとって「本」とはどのようなものでしたか。最も適当な部分を本文中から探し、五字で抜き出して答えなさい。

問八 空欄 X にあてはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア はれがましい
- イ 未練がましい
- ウ おこがましい
- エ 言い訳がましい

問九 傍線部⑧「それ」の指すものを本文中から十字程度で探し、抜き出して答えなさい。

問十 傍線部⑨「書き初めに向かう子どものような気分」とありますが、この時の「ぼく」はどのような気持ちですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ不釣り合いだとしても、他人の言葉の中に自分の言葉を見出していこうとする気持ち。
- イ 自分は小説を書くことによって、ミツザワ書店に対してつくないをしていこうという気持ち。
- ウ 自分のような駆け出しの作家でも、書き続けていけば世の中に認められるはずだという気持ち。
- エ 自分自身の言葉をつむぎ出す行為を続けていこうという思いを新たにし、身の引きしまる気持ち。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、一部変更しています。)

児童期には自分が好きで自分に満足していたのに、青年期になるにつれて、自分が嫌いという人が増え、自分に不満という人が急激に増えていく。このことは、まさに自分を見る目が厳しくなってきたことの証拠といえる。自分に対する要求水準が **A** ため、なかなか自分の現状に納得できないのだ。

ただ何となく生きてきたのが児童期だとすると、青年期になると「こうありたい自分」というものを意識するようになる。それを「理想自己」という。現実の自分を「現実自己」という。児童期には現実自己をただひたすら生きていた。ところが、青年期になると、理想自己というものを思い描くようになり、現実自己を理想自己と比較するようになる。そこで、理想自己に **B** 現実の自分を意識せざるを得ないため、自分に満足しにくくなるというわけだ。

理想自己の形成には、青年期になると抽象的思考ができるようになることが関係している。そのため、具体的な行動と結びついた理想自己だけでなく、抽象的な価値観と結びついた理想自己もつようになる。

たとえば、**C** というような具体的な目標をもつだけでなく、**D** などといった抽象的な目標を意識するようになる。具体的な目標と違って、このような抽象的な目標になると、その達成のためにどうしたらよいのかがわからない。

〔中略〕

今の自分にどこか納得がいけない。でも、どうすればよいのかわからない。ここに産みの苦しみがある。第二の誕生という課題を前にして、どんな自分になったら納得できるのかが見えてこない。そこで、まずは自分が気になってくる。

そんな不快感を抱えた状態は、けっして気分の良いものではない。方向性を見つけて、こんな苦しい状態から何とか脱したい、早くスッキリしたいと思うかもしれない。でも、今の自分に納得がいけないからといって、自分を否定する必要はない。

自己の二重性を思い出してみよう。「見られてる自分」^{*}に対して納得のいかない「見ている自分」がいるわけだ。その「見ている自分」は、適当に流されている自分にも不満をもたなかった以前の自分と比べて、はるかに向上心に満ちた自分と言えるだろう。そんな自分は、けっして否定すべきものではない。むしろ肯定し、^②応援すべきなのではないだろうか。

「自分らしく生きよう」とよく言われる。これからは **E** の時代だ。みんなと一緒になんて面白くないじゃないか。もっと自分らしく生きなきゃダメだという。

たしかに何でもみんなと同じなら自分である意味がない。自分で考えて生きているという感じにならない。ただみんなに合わせて生きるだけの人生なんて、とても魅力のあるものには思えない。

先生は「自分らしく」とか「**E**」とか言うけど、今の学校でみんなと違うことばかり言ったりしたりしたら、完全に浮いてしまう。みんな自分が浮かないかということばかりを気にしている。たとえば、みんなの話についていけなくなったら大変だと怖れている。そのため、ほんとうは興味のないテレビ番組を視たり、YouTubeで共通のネタを仕込んだり、くだらないと思うネットの記事やブログを読んだり、ホンを言えば「あんまりつきあいたくないなあ」と思う人たちのグループに属したりしている。

先生たちだって、そんな教室の空気はわかってはいるはずだ。それなのに「自分らしく」なんて言われたって困る。いったいどうしろって言うんだ。そんなふうに文句も言いたくなるだろう。

でも、ちょっと考えてみよう。今の教室みたいに、この先の人生、ずーっと、周りのみんなに合わせることはかり考えて、周囲から浮かないように空気を読んで、自分のホンを抑え続けなければならないとしたら、何だかつまらない人生に思えないだろうか。そんな味気ない人生なんてイヤだなあと考えてこないだろうか。ふつうの神経なら、^④欲求不満で爆発してしまうのではないか。

だったら、どうすればよいのだろう。

「好きなことをしよう」と言われることが多くなった。キャリア教育というのが急に盛んになってきて、嫌々仕事をする人生なんてつまらない、そんなんじゃない仕事を楽しいから、好きなことを仕事にしようなどと言われる。

そう言われても、好きなことって何だろうというところをつまずいてしまう。そんなことはないだろうか。

〔中略〕

「自分にしかできないことをしよう」なんて言われることもある。そんなことができたらカッコいいなどだれもが思うはずだ。自分もそうしたいと思うだろう。思うまではいいのだが、そこから先に進めない。

「自分にしかできないこと」をしたい。それは、本気でそう思う。それなのに全然先に進めない。なぜなのか。それは、「自分にしかできないこと」というのが、いったい何なのか分からないからだ。まったく見当もつかない。

それは当然だ。まだ実社会に出ていないし、人生の序盤を生きているだけなのだから。自分にできることが何なのか。できないことは何なのか。そんなことは、いろいろやってみないうちからわかるわけがない。【 X 】【焦る必要はない。

というよりも、今からそんなことまでわかったら、人生の謎解き^{なぞと}ができちゃったみたいで、この先の人生のワクワク感がなくなり、つまらない人生になってしまうのではないか。もう少しじっくり楽しんでほしいだろう。

(榎本博明『自分らしさ』って何だろう?』による)

〔注〕※「見られている自分」……「自分自身を見つめる」という時の、「見つめられる自分」のこと。

問一 A・B にあてはまる表現として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

A ア 下がる イ 変わらない

ウ 揺れる エ 高まる

B ア ぜつたいに届かない イ まだまだ届かない

ウ かんたんに届く エ もう届いている

問二 C・D に入る例として適当なものを、次の中からそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 「テストでもっと良い成績が取れるようになりたい」

イ 「もっと自分に自信がもてるようになりたい」

ウ 「こんな退屈な日々から脱出したい」

エ 「日曜日は野球をして遊びたい」

問三 傍線部①「第二の誕生」とありますが、これは、人がこの世に生まれてきたことを「第一の誕生」と考えるのに対し、「青年期」について表現したものです。このように表現したのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 自分を意識しなくても生きていられる時期から、自分について考えながら生きていく時期になるから。

イ 幼い自分を嫌いになる時期を迎えることで、大人としての自分をより好きになれる時期になるから。

ウ 現実の世界を生きていた時期が去り、他人から理想とされる自分になりたいと考える時期になるから。

エ 目標がなくても生きていられた時期が終わり、自分で計画を立てて行動したくなる時期になるから。

問四 傍線部②「肯定し、応援すべきなのではないだろうか」とありますが、それはなぜですか。本文中の表現を使って、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

問五 E に入る表現として適当な漢字二字の語を、考えて答えなさい。

問六 傍線部③「そんな教室の空気」とは、どのような空気ですか。それが最もよく分かる一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④「ふつうの神経なら、欲求不満で爆発してしまうのではないか」とありますが、それはどうなるということですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それなりに周りに合わせるができる人でも、いつかは疲れて、合わせ方が分からなくなってくるということ。
- イ がまん強い人ばかりいるわけではなく、多くの人は周りと意見が合わないので、けんかが増えてくるということ。
- ウ よほど自分を抑えられる人でない限り、周りに合わせきれなくなり、本心を言ってしまうようになるということ。
- エ 人生がつまらないと感じる人の方が多いので、いつそのこと周りに合わせなくてもよい世の中になるということ。

問八 「X」には、次の各文を並べ替えた文章が入ります。適当な順番にして記号で答えなさい。

- ア そうしているうちに「自分がやりたいこと」や「自分にしかできないこと」が徐々に増えてくるものだ。
- イ この先さまざまな経験をすることで、「自分にできること」や「自分にはできないこと」が見えてくる。
- ウ また「自分にできること」が増えてくる。

問九 傍線部⑤「もう少しじっくり楽しんでもいいだろう」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今の自分に何ができて何ができないのかを知りたいと焦っても、社会に出て仕事してみないのに分かるわけではないので、子供のうちはいろいろなキャリア教育を楽な気持ちで受けるのがよいということ。
- イ 好きなことをしようと自分にはできないことをしようなどと、子供の頃から言われるが、社会での役割を決めるのが早すぎると飽きるのも早いので、もつと気楽に考えて生きていくのがよいということ。
- ウ 自分にできることやできないことが分かるようになる方法は、一生をかけて明らかにする人生の謎であり、新しいことをすればするほど早く近づけると思い、楽しみながら生きていくのがよいということ。
- エ 自分がやりたいことや自分にしかできないことを知りたいたいと思っても、人生の序盤のうちから結果が出てしまうと、逆に楽しみもないので、分かるまではさまざまなことに取り組んでみるのがよいということ。

問十 本文の書き方の特徴として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 若者が使う言葉を生かして、いつも青年期の若者の側に立つことを忘れず、若者の目線から書くことを心がけている。
- イ 倒置法や比喩を多く使うことで、現代の青年期の若者が向き合っている重要な悩みを、ていねいに解き明かしている。
- ウ 青年期の若者の気持ちに気を配りながら、その時期を越えてきた大人の視点からの意見をはさんで、論を進めている。
- エ はっきりとした結論を出さないようにすることで、青年期の若者が他人に頼らず生きていけるように気をつけている。

